

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判

1 卷

現代短歌分類辞典

改裝版「か」

通卷 159

昭和六十一年八月廿二日発行 定価一三、五〇〇円
著者発行 兼印刷者 津 端 亨

発行所 現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒111 東京都台東区鳥越一ノ十一ノ八
電話(〇三)八五一―九八六九番
振替 東京 三―九三二一四

「改装版に当って」

拝啓、初秋の候、益々御清栄のこととお喜び申し上げます。

父が昭和廿九年三月「現代短歌分類辞典」第一巻を自費刊行して五十五年十月、八十五歳をもって世を去る迄に五十四巻、そして五十六年、父の遺志を継いでからの一〇五巻、現在では「ア行分」計一五八巻の龐大な巻数となりました。

さて、当辞典もこれまでのB6判で巻を重ねてまいりますと、各大学、図書館各位におかれましても蔵書のスペースも少なくなり、愛読者各位の御要望をも鑑み、このたび次巻「か」の篇からコンピュータを導入駆使しA4判に大型化し、スペースの問題を少しでも緩和すると共に辞典の編纂、印刷のスピード化を図ることに致しました。今までのB6判をA4判の改装判として面目を一新して今後五年間に全集完成に持つてゆく所存であります。五十六万首のカードをコンピュータに掛けることにより、長年月かかつて也不可能視された「現代短歌分類辞典」完成への父の夢を悲願を今後五年間に日の目を見る目鼻がついたことは父のライフワークである当辞典を受けついで私にとってこの上なく喜びとする事であり、何よりの孝養かと存じます。

これまで斯界の諸先生を始め皆様より「この辞典は全巻完成を見て始めて短歌を志す者、研究する者、将又実作する者にとっても大いに役立つであろう」と多大な御期待と激励の御手紙、お言葉を頂いておりますので必ずやこれが完成にもつてゆくべく一層の努力を重ねたいと存じます。

改装版第一巻を本日見るにあたり、これまで長年日に互り格別に御愛顧を賜りました御得意様各位に深く感謝を述べると共に今後共宜しく御愛顧御引立頂きますよう御願ひ申し上げます。

津 端 亨

昭和六十一年 初秋

「自序」

津端修

一、本事典は明治、昭和三代、短歌三十万首を単語による品詞としたもので、作者別による歌集を縦の分類とすれば、これは歌集を解体しての横をつらねた分類であり、その集大成されたものである。

二、単語の解釈は、意味の上からと、文法の上からと、内外両面からわかりやすく、要領よく解説しようとしたもので、云わば歌語に現われた単語の国語辞典であり、総索引である。

三、文法の理論の上から云って当然有るべき筈の活用形が、実際の上からは見当らないことなどが、この辞典によって活用形ごとに列挙したことによって明らかにされた。

四、用例を古典の勅選和歌集、物語、日記の中に求めて豊富に挙げたこと、このことは古語が現代歌人に引継がれて、今日なお生きていることを如実に示したものである。

五、現代歌人によって詠まれた新造語、それが誰によって詠まれたかが明らかにになり、その新造語の継承者の有無も亦明らかにされた。

六、五十六万首の歌が同一語を含んだ歌で、離合集散する多角観賞、多角研究の厳しさは多くの相似作品の発見をたやすくさせている。相似作品の究明は、昭和今日の歌が源を遠く明治の初年に発して、幾多の脱皮を遂げたことを実証的に示すものであり、こうした観点からの短歌発展史が、何人かによって書かれる示唆を讀者は受取るにちがいない。

七、古典に見られない文法の出現も明らかにされた。活用語の活用で使用された最初の頃にあつては、文法上の誤用と見られたものも、年代を経るに従つて使用者の増加はいつかそれを文法上の一角を切取らせて、確乎たる位置を占めさせるに至つたことである。それは氾濫した河川の低地に新しい流域を作つたと同じである。水は低きについて流れるように、時代人の好みも亦如何ともなしがたい勢をつくるものである。

八、この辞典のそもその出発点は、研究者に多くの資料を提供することにある、所用資料獲得に消費する時間と労苦を最大限に節約し以て、研究者の能率を引上げることにあつた。従つて、歌に対する編者の好みといったものによつての項目ごとに挙げられた引用歌の増減ということはない。いつの場合にあつても、各項目下に列挙された歌数というものは、五十六万首の中にあつてのすべてであり、五十六万分のいくつを正確に示したものである。

九、水は流れていなければならない。とまると腐りは始めるからである。実作者にとつての危機、現在の歌境に安住することを絶えず刺戟するものとして、この辞典の豊富な資料は、作歌意欲を昂める上に必ずやお役に立つことを信じたい。

十、歴史とは所詮は機会均等獲得に向つて苦闘といったものかも知れない。この辞典の狙いとするところも、亦、質を低下せず、より多くの讀者と接したいことにある。同一単語を扱つて多種多様な表現の実例と単語の解釈は、歌の初心者にとつて闇夜の炬火たれとの編者の念願そのものにはかならない。讀者層の幅を広くするための苦心の一端である。

十一、故人で主要な歌人の作品は、全作品を載録する方針をとつた。現役として今日活躍しておられる歌人の方々の作品は、昭和五十三年迄の歌集を底本とした。

十二、五十六万枚にわたるカードのこととて、その操作中に誤つて他に混入されたものが、後に発見されるかもしれない。そうしたものは補遺巻をつくるか、巻毎に増版の折に補遺とし巻尾に加える方法をとりたい。引用の歌集名は、歌の下に歌集名を記号数字で示した。

昭和二十九年三月

十数年の年月をかけて書き集められた十六万枚のカード—それは、現代歌人の歌語を、その歌集から渉獵された成果であつた。津端君の労作「現代短歌分類辞典」は、こうした良心的な基礎作業の植えに据えられたもので、かいなでの仕事ではないのである。特に和歌の源泉ともいふべき万葉集の古代語が、いかに、詩語として、現代の生活感情の中に生きてをるかを如実にものがたる興味は、けだし尽きぬものがあるのを覚える。この書出でて益せられる者は、ただに作家者のみにとどまらぬであらう。

明治四十三年、時事新報の選歌を自分が担当してゐた時、君の処女作といふべき「なによあにかくは心の寂しがる岡の上より夜の街見て」を秀逸の作として採つたのが、君の歌への関心のはじまりであつたといふ。まことに長い年月の縁であつたことを思ひよい種をよい土に蒔いたことと喜ばしい。ここに請はれるままに、欣んで一文を寄せた次第である。

昭和二十八年十一月

窪田 空 穂

私とは旧知の關係にある津端修君が、「現代短歌分類辞典」と題する新辞典を著し、これを刊行しようと企てられてゐるところから、私にも推薦の辞を求められた。

津端君は洵に文芸愛好の念の深い人で、明治時代の末期を、謂わゆる文学青年として過した一人であるが、その純情を今日にまで持続し、創作に研究に傾倒している人である。その津端君が、多年の体験から、現代短歌の全貌を一望のもとに収め得る書で、鑑賞と研究の両面の用に堪える書を著そうと志して、多年、独力で、そのことに當つて、ついに所期の目的を果し得たのが本書である。

その辞書に収めてゐる短歌は、現代の作家の作の十六万首である。現代の短歌集は得易きに似て実は得難い。十六万首という短歌を、歌集に依つて新に得ようとしても殆んど不可能に近い。単に鑑賞用としても、これだけの歌を一書に依つて知るを得るとすれば、それだけでも比類なき便利なものといふべきである。

津端君は、更にこれに新想を加えて研究の便を計つていられる。それは。この十六万首の歌を、その中に用いられてゐる歌語を目標として、尨大なる歌群を一々分類し、その単語によつて研究者所要の作を容易に引き出し得るようにしていられるのである。この辞典の特色は無論その面にあるのであつて、これは甚だ便利なことで、従来、もしもそのような書があればと、研究者を歎かしめたことであるが、それが初めて津端君多年の労苦に依つて充たされるようになったのである。

短歌に関する辞典は従来も無かつたのではないが、このような辞典の現われるのは今回が初めてである。これが刊行になつたならば、いかに多大の便利を得ることであらうと、私自身甚しく待望されることである。云わるるまに飲んで推薦の辞を列ねた。

昭和二十八年十二月六日

和歌を分類するということは、万葉をはじめ勅選集にもあらわれているが、古今六帖あたりから出発した類題集の発展に、その著しい姿が見られる。江戸時代になると実に尨大なる類題和歌集が出ていて、私は東北大学付属図書館の書庫に入ること驚きを感じるのである。これは和歌が類題を主とするようになったからのことで、俳句の季節別句集と歩調を合せた現象である。

ところが、これらの類題歌集が今日ほとんど高閣につかねられるようになったのは題詠がすたれたからでもあるが、むしろ収載した歌があまり優れたものでなく、ただ沢山の作品を集めるというだけで、後には全国から歌を募集して、誰でも金を出せば載せるというようなことまで行われたからである。

このたび津端さんが企てられた分類辞典は、それとは少し様子が違うようである。第一、類題的分類ではなく、用語による分類で、これは語学的にも意義あり、歌の用語を知る必要がある時には歌人にも役立つであらう。第一には、収載された歌が現代の大家を中心にしたもので、中々優秀な作品に満ち、現代短歌全集を作者別でなく、素材別に編んだというような形になっていると思われる。これは現代の短歌編纂の進歩を示す一つの標本であるかも知れない。

何事も伝統の上に立つて新しい道をひらくべきであるが、津端さんの努力もやはりその一つであると思ひ、成功を祈つてやまないものである。

昭和二十九年二月十七日

久松 潜 一

文学や言語に関する辞典は種々表れているが、その一分野である短歌に於ても近時二三の辞典が発表された、津端修氏の現代短歌分類辞典もその一つとして挙げられるとともに、極めて特色のある辞典である。というよりは、多年の努力がはじめて実を結んだという点で類がない。十六万のカードをとるということは容易には出来ないことである。その上で歌の中から総ての語をとりあげ、それによつて分類し、その語の解釈を行い、その語を含む歌を集めてある。従つて一面では歌語辞典という性質を有するが、それとともに明治・大正・昭和にわたる主要な短歌作品を集成して居る点が本書の大きな特質となつてゐる。それは短歌索引ともなつてゐる。

私は、かつて正岡子規が病床にあつて俳句索引の仕事に不断の努力をつづけたことを知つて、一方に華やかな俳句や短歌の革新を理論と作品との上で行きつづ、こういう地味な仕事を行つたことに深い感動を覚えるのである。明治・大正・昭和の文学もすでに種々の立場から評価が加えられ、文学史的な叙述が行われているが、一方では書誌的な方面から資料を蒐集整理することも必要となつてゐる。短歌に於ても同様である。この時に本書が出ることは、種々の点から意義の大きいのを感ずる。この書によつて私も教ええられる所が多いことを期待している。

一言して本書の成るを喜び、著者の労苦に対して感謝の意を表するものである。

昭和二十九年二月三日

土岐義麿

津端君から「現代短歌分類辞典」の校正刷を見せられて、たいへんな仕事をしたのだと、じつはおどろいた。これまでそういう話を直接にきかなかつたが、十数年もかかつて十六万枚のカードをくり、それをこまかく、更にこまかく分類して、そこに一種の体系をつくつてみようとする作業は、よほどの熱意と根気がなければできないものでない。しかも、それがわれわれと同じ時代の作品を対象とするとき、作家にたいする、すき、きらいなどを越えた無私の愛情とでもいうべきものが必要であり、その点からも編者の性格や態度がうかがわれる業績といつていい。

万葉集については、すでにその索引や年表の類が作られ、中世勅選集や私家集についても早く国家大観があつて、どれほど多くの便益を常にわれわれが受けているか、はかり知れないものがある。ところが、津端君の新著は更に用語、句法などにわたつて、近代における日本語の伝統的実態というべきものを、観察する資料ともなり得るものであり、短歌表現を通じてみた限りにおいて、おそらくこれ以上のまとまつたものはあるまいと思われる。まつたく画期的な労作というに憚らない。

われわれは津端君の努力に感謝すると共に、短歌の社会的運命をも考える機会をもつことになるであらう。

永いあいだ黙々としてつとめた津端君にたいし、いまわれわれは嘆賞と慰労のことばを發して、完遂のよろこびをひろく伝えなければならぬ。

一九五四年二月七日

尾上紫舟

「現代短歌分類辞典」の著者津端君が、或る日、私にこう云つたことがある。旅行しての一夜の宿泊にしても、宿泊料に茶代を添えて払う。まして一生涯を過ごさせていだいたこの現世に、何か支払つて行かなければ申訳がない。金を残したところで仕方がない。もつとも金も残せそうもないけれど、といつて本書の企画を話し出した。これなら現世に、はた後世の人々のために、何等かのお役に立つのではないかというのであつた。

その時の話が実を結んで今、校正刷を見るに、分類において処女地を開拓している。単語による分類、それも活用語は終止形によらないで、活用形ごとに分類したことは、新しいし便利である。古典を獵つての用例は豊富に挙げられたことも親切でよい。

十六万首にのぼる歌の延歌数は、一首を構成する単語七乃至十と計算しても、一寸想像もつかない数字を示してくる。私は著者の真摯なる態度、この世に宿泊料を支払うつもりで企画したという情熱に動かされて、序文を草し、著者へのはなむけとし、一路平安を祈つてやまない。

昭和二十八年十二月三十日

野村八良

此の頃、勤先の駒沢大学に於て、偶然津端修君の訪問を受けた。私としては全く予期しなかつた事であるが、段々其のお話を聴いてみると、お目に懸つてよかつたと、ささる欣快を覚えた。

同君は、独力を以て、精根を尽しつつ、都下の閑寂境たる青梅市で、筆硯に親しんで居られる。其の御事業は、実に地味で、而も文界に於ては、肝要な編纂である。題して現代短歌分類辞典と云ふ、

和歌の索引は、古く山本春正の古今類句があり、明治時代に松下大三郎氏等の五句索引の国歌大観が出来たが、津端君のは、範圍を現代の夥しい歌人の作品とし、方法若しくは様式で、名詞・動詞・形容詞・副詞等の概念語を基準としたコンコードダンスとした物で、随つて編輯、校正等に多大の労苦を要するわけである。併し同君の熱意と努力とは、文壇不可欠の此難業を克服せられる事と確信する。私は茲に此の挙に賛同の意を表しつつ、言を巻頭に添へる次第である。

昭和三十六年六月十四日

武田祐吉

一月十五日、成人の日の朝のことである。津端さんが見えて、その労作になる「現代短歌分類辞典」の出版の緒についたことを話された。この書は、明治・大正・昭和の三代の短歌十六万首を用語によつて分類登載したもので、一首の歌も、その用語の各項にわたつて重出してあるのだから、全体の歌数は非常な数にのぼるのである。

各語ごとに適切な解説を加へて次にこの歌の詠まれてゐる歌を列挙する。そこで例へば、色彩についてこの時代の歌人が、どのやうな感覚をもつてゐたかをしらべようとすると、その關係の項を見れば、たちまちに貴重な資料が得られる。古語についても、新語についても現代の短歌の研究には是非備へなければならぬ書物である。

ちやうど明治書院の安藤英方老が同席してゐたが、分量の多い原稿には馴れてゐるはずの同老も、津端さんが単身でこの大著を成しとげたことに驚嘆してゐた。これから第一冊が刊行されるのだが、全部の出版を完了するのは、いかに順調に運んでも、津端さんお一人の方では十年はかかるのではなからうか。この種の索引辞典は、完成してはじめて意味があるのだから、すこしでも早く出版を完成していただきたく、せめて五年ぐらゐで出版が完成して、早く世の役に立つやう、出版の協力者の現れることを祈ることである。

終に、慾を云へば、各語の下に出所の書名を記しておいてもらひたかつた。最後には使用した書名をかならず記載していただきたい。このことはき既に予定されてゐるやうだが、折角の大著であるから特くに注文をつけておくのである。

昭和二十九年一月

佐伯梅友

こういう本が出ていることも、まして、こういうしことを着々進めている人があるということも、今まで私は知らなかった。特志家というのはこの人をいうのであろう。まことに情熱をもたなければ出来ないことである。

こういう本は、一冊もついていたのにはたいした意味も持たないであろうが、何冊も積み重ねられると、まして、完成された後にはいいよ、いろいろな事を考えるたよりとなり利用される面は大きいであろう。特に短歌の制作と鑑賞とに従う人には、便利なものだろうと思われる。

それで私は、編集者に対しては、切にこれが完成を祈るとともに、一般の方々には、この完成が促進されるように、一部でも買つて協力されることを願つて止まない。

昭和三十三年二月十七日

小杉放庵

先年思いついて、歌集短歌雑誌等よむ毎に、いい歌だと感じたものを記し留めて居ります。得心抄と名づけた帳面、なかなか数が上りません。ところへ津端氏の短歌分類辞典これはよき物と思つた。近代現代の歌人、知つた人知らなんだ人、余さず網羅してある明治・大正・昭和の短歌は、万葉以来の盛観だと、今更の如くに感心します。しかも分類がゆきとどいて居る。良き歌を見るに従つて記し留める。得心抄の蓄積も見る見る増加はや三冊になりました。時どき取り出して、小音で、じたり、だまつて読んで見たり、近頃の楽しみ、よき勉強です。まことに津端氏の辞典の仕事は恐るべき労作であり、感謝さるべき事実と思う。だんだんに出版されて、既に第八冊に及ぶ由、まだまだ前途に数知れぬ材料が山積みして居る事でしょう。こうなると津端氏の健康を大切なものにする。気永にゆつたりとくたびれずに、完成に向つて進んで行つて貰いたいものです。

昭和三十四年六月二十五日

太田水穂

二十年短歌分類をこつこつとやり居る君に益をぞ送る。

昭和二十九年二月十二日

吉沢義則

遂げむとしてえ遂げざりし
我が学業の一つなり

今日今日と望み暮していっしかも七十九才の春は迎へぬ

昭和二十九年一月二十三日

玉井幸助

現代短歌分類辞典、これは明治・大正・昭和に亘る三代の短歌十六万首を集め、その中に含まれる歌語を抜き出して五十音に排列し、その歌語に対する意味および文法上の用法を簡明に解説した上で、その歌語を含む歌全部を作者名を添えてそこに集めたものである。世に「類題和歌集」というものがあつて、初心の作家者を益しているものであるが、この辞典はそれの更に更に詳しいもの、いわば「類語和歌集」とも名づくべき、全く新しい非常に便利な、そして驚くべき大規模な現代和歌集である。十六万首のそれぞれの歌には、歌語として注目すべき単語を二つ以上含むことが多いから、この辞典における延歌数は何十万にも及ぶであろう。それを整理し検討して便利な形に組み立てるといふことは、頭脳明晰、精力絶倫、しかも無欲の人でなければ出来ないことであるが、ここに津端修という人があつて二十年の刻苦精励を積んだ結果、その原稿の全部を完成し、しかも第五巻までの出版を遂行せられたのである。

私は今まで津端さんを知らずにいたことを恥かしく思う。このたび人見東明先生の御紹介によつてその人を知りその著書を示され、その人を尊敬すると共に、その著書から受ける学恩を感謝せずにはいられない。

現代短歌分類辞典は、ひとり作歌に志す人々を益するばかりでなく、広く和歌文学や和歌史を研究する上にも、更に広く国語を研究する上にも、豊富な資料を提供し、求める資料を短時間で見つけさせてくれる極めて有難い本である。私は早速既刊五冊を購入して座右に供えたのであるが、この上は一日も早く残りの部分が出版されることを祈念して止まない。

昭和三十四年二月二十七日

矢野峰人

十六万枚のカードと聞くだけでも、その蒐集に如何に多くの歳月と努力と経費とを要したか、想像に絶するものがあるが、更にその整理分類に至つては、それ以上の時間と苦心とを要する事、更めて言ふ迄もない。津端氏はその至難事を、独力で見事に仕上げたのである。

このやうな地味な、労多くして報いらるる所少き仕事は、拙速万能・実利主義支配の現代に実行された事は、たしかに驚嘆に値すると評してよからう。而して、氏をして斯くも長期に亘りこの大業に従事する事を得しめたものは、一に、短歌に対する、否、広く文芸に対する、氏の熱愛に外ならない。そして、われわれも亦、この一筋によつて、氏につながつて居るのである。

本辞典の価値に就いては、既に多くの斯界の長老先達によつて讃辞が献げられて居り今更私如きが蛇足を加へる迄もない。私としては、唯、この一筋の糸の一端に立つ編者に激励と感謝の辞を贈ると共に、他端を支へる同好の士の倍旧の支援を希つて、この偉業刊行完了の日の一日も速ならん事を祈るのみである。

昭和三十五年六月下旬

新村 出

現代短歌分類辞典の第二巻が近々上梓されるさうで、編者の津端氏から何か感想の序言を書くやうにとの御懇望に接し、欣喜の情をもつて筆を執つた。この春、端なくも其の第一巻をいただき、私は何度となく披見し愛誦し利用したことであつたらう。元來わたくしは、歌集や句集を閲し、再読し通覽し味読し、或は鑑賞し、我は検索し、かつ考証に供し、かつ趣味に資する等、随時即時これを利用せんとするために、自から進んで当該の歌集句集に対して、前後の余白に、名辞そのほかの語句を鉛筆で、おのおの其のページ数を附記しつつ、とびらとなく、奥づけとなく、ぼつぼつと書きこんで、一回又一回、補遺し増補して止まない癖をもつ。そのため往々、美本をダイナシに汚す憂へもあるが、むろん相当な顧慮はしてをる。もちろん、これは自分だけの興味や個人だけの必要に応じての手すさびであり、偏頗に傾き、周到を欠くわけであるが、後々自分の便に、備へるための工作に過ぎない。随筆や老証や辞典やの目的も大いに加はつてゐるが一つには道楽でもあり、物数寄でもある。その分類たるや、もともと主観的な偏向に基づき全く客観的な統一的な秩序に拠らない。歌集や句集の撰択においても亦同様であつて、偶然性と趣味性が主であつたから、普遍性はなく、利己性のおぼえ書き、備忘録にとどまつてをる。ただ、今度津端氏の並々ならぬ努力や苦心や根氣に対しても、如実に自身の経験からして、或は普通の読書以上に、編輯の少からぬ苦勞と、而も無比の複雑多岐な煩勞とに対して、深き洞察の情に堪へないことを感ずる。況んや、自分のが専ら利己心に出で利己心に了らんとするに対して、編者の誠意が、一に利他の目的を以て進んで公共的精神に発してをることを知つて、厚き敬服の念がいよいよ高まらざるを得ない。

古くは、松下大三郎氏の国歌大観正統二編の歌集および索引の四大冊があつて、幾多の学徒や歌人に裨益を與へてゐるが、いまこの現代短歌分類辞典も、遂次刊行完成する暁には、別種異曲の利便をわれわれに供するに至らんことを切望してやまない。

昭和二十九年十二月十日

山田 孝雄

かつて東京にて一夜面会したることありし津端修君、かねてより明治・大正・昭和三代にわたり、著名作家の短歌十五万首を分類聚彙して、詞毎に簡明なる解説を加へ、編して辞書の体をなし現代短歌分類辞典と名づけ公刊せられむとするに際し、その一部分を示して序を求めらる。受けて熟覽するに、讀すべきこと少なからず。一はその内容の充実せることなり、二はその提示の方法の親切なることなり、三はその語の古來の用例の要を示したることなり、四は簡にして要を得たる解説なり、凡そ、この四点は本書をして学界に重んぜらるべく要求せしむるものなり。余は今、芭蕉の俳諧に就いて仔細に検討を加えつつありて、本書の行へる所に相似たる方法をとれり。この故に著者の苦と方針とは、体験の上に於いて諒とするものなり。本書は和歌を鑑賞する者の為にも、国語を研究する者の為にも、座右必備の書となるべき本質を有するものと信ず。

昭和二十九年二月五日

下村 海南

世の中に特志家といふクラスありその一人を津端君に見る
富士山の幾倍となるか短冊を十六万枚縦につなげば

堀口 大 学

第九巻のはじめに
この道は長い道です
まつぐな細い道です
曲らない長い道です
どこまでも続く道です
津端さん あなたの道です
あなたがたつた独りが
とほとほと辿る道です
いつまでも どこまでも続く道です
死ぬまでのこれは道です
死んでもなを続く道です
いつまでも どこまでも
足跡の残る道です

引用文献歌集一覽

あ

阿部 静枝 (秋草／霜の道)
近江 満子 (紫に咲く)
荒木 暢夫 (白塩集)
芥川 徳郎 (茅花)
浅野 豊子 (山かげ／白縫)
朝吹 磯子 (蒼樹／蒼炎／蒼受)
芦田 高子 (内灘)
東 季彦 (六十九日の旅／八仙山)
会津 八一 (南京新唱／南京余唱／山光集／寒灯集)
天田 愚庵 (巡礼日記より／愚庵和歌)
鮎貝 塊園 (鮎川塊園篇)
新井 洸 (微明／新井洸歌集)
青木 繁 (青木繁画集)
青山 霞村 (池塘集)
安立 ハル (この梅生ずべし)
浅野 梨郷 (梨郷歌集)
明石 海人 (白猫)
赤木 健介 (意慾)

い

伊藤左千夫 (左千夫歌集)
伊藤 保 (仰日)
伊藤 嘉夫 (新土)
筏井 嘉一 (荒)
生田 蝶介 (宝玉／渦潮)
池原 樟雄 (透影／双塔賦)
石川 啄木 (一握の砂／悲しき玩具)
石川 まき子 (竜胆／天の砂／不在)
石 千亦 (潮鳴／鷗／海)
石原 純 (鰻日)
石井直三郎 (青樹／青樹以後)
幾造 (寡黙なる日)

市山 盛雄 (韓郷／崇礼門／雲洞凡)
泉 甲二 (白き秋)
稻森宗太郎 (水枕)
岩上とわ子 (ながき虹)
岩津 資雄 (事に触れて)
今井 邦子 (迷走／片々／光を慕ひつつ／紫草／明日香路／こぼれ梅／明日香路以後／拾遺集)
今井 妙性 (四大不調)
今井よしの (悲願)
岩波香代子 (都わすれ)
市川 敦子 (水橋の枝の下)
岩倉 具規 (岩倉贈太鼓大臣集上／岩倉贈太政大臣集下)

飯田 年平 (石園集上／石園集下)
入江 為守 (現代短歌大系より)
池袋 清風 (かかしのや集)
印東 昌綱 (かへりみて)
筏井 嘉一 (現代短歌全集第七巻より)
岩谷 莫哀 (春の反逆／仰望／仰望以後)
石井直三郎 (青樹)
伊藤 公敬 (どん底で歌ふ)
伊藤音次郎 (伊藤音次郎口語歌選集)
生駒あざ美 (いこま／喜寿／残照)
泉 幸吉 (急雪)
石川福之助 (夕光)
石川やゑ子 (夕光)
伊藤 源 (三十年)

う

宇都野 研 (十姉妹のまへに立ちて／木群／宇都野研全集)
潮 みどり (潮 みどり歌集)
臼井 大翼 (私燭／私燭以後)
内山 賢次 (津端修宛はがきより)
鶴木 保 (一教師の歌へる)
生方たつあ (山花集／雪明／春尽さず／雪の音譜／白い風の中で)

上杉 一甫 (二甫歌集)
上田 英夫 (草路集／早春)
植松 寿樹 (庭燎／光化門／枯山水／渦若葉)
海上 胤平 (椎園詠草上／椎園詠草中／椎園詠草下)
氏家 信 (現代短歌大系より)
上田 穆 (街の放射線)
内田 穰吉 (たたかひの獄)

え

越前 翠村 (創作より)

お

奥川 夢郎 (小鳥)
奥貫 信盈 (朝霧／脳出血闘病記)
奥村奥右衛門 (奥村奥右衛門歌集)
落合 直文 (萩之家歌集)
音馬 実 (冬青の葉／水苔集)
大熊長次郎 (蘭箸待)
大田垣蓮月 (蓮月、式部二女和歌集)
大野 誠夫 (薔薇祭／山鳴)
大場 寅郎 (凍谷)
大橋 松平 (門川／幼学／淡墨)
大村 呉楼 (花藪)
大岡 博 (溪流／南麓／童女半跏)
太田 五郎 (胎生)
太田 水穂 (つゆ草／山下湖上／続湖上／雲鳥／冬菜／鷺／鵲／螺／流鶯／双飛燕／老蘇の森)
太田黒敏男 (阿蘇のけぶり)
多 久麻 (残像)
大熊 辨玉 (由良半呂集二・由良半呂集二)
大口 鯛二 (大口鯛二翁家集)
大和田建樹 (山したみづ／大和田建樹歌集)
大西 祝 (大西博士全集第七巻)
大井 広 (きさらぎ／悲心抄／白檀)
大塚金之助 (朝あけ)
大田遼一郎 (獄中にて歌へる)

大蔵 宏之 (地図を描く鳥)
大沢 春子 (竹蔭集)
太田 青丘 (国歩のなかに)
大河内由美 (朱槿)
大脇 月甫 (春扇)
大坪 唱一 (盲魚)

か

加藤 東籬 (加藤東籬集)
加藤 洵綾 (霧苔／雪線)
加納小郭家 (加納小郭家歌集)
鹿兒島壽藏 (潮汐／新冬／茉莉花／春露／求青／麦を吹く風)
鹿兒島やすほ (ひとりしづか／しらかば)
嘉納 とわ (草にふる)

梶原九八郎 (梶原九八郎歌集)
片山 広子 (翡翠／野に住みて)
片岡 恒信 (山木魂／沙なぎさ)
金子 千鶴 (金田千鶴歌集)
金子 薫園 (片われ月／小詩国／わがおもひ／覚めたる歌／山河／草の上／星空／静まれる樹／濃藍の空／凌霄花／叙景詩／冷人／白鷺集／朝顔)

金子信三郎 (金子信三郎歌集)
金子 不泣 (重髪／独居／荒磯浪／風雪)
金子 元臣 (金子元臣歌集)
河上 肇 (異色十歌人より)
川久保俊一 (那須／蒼雪)
川崎 杜外 (山守／川崎杜外歌集)
川上小夜子 (光る樹木)
川田 順 (陽炎／伎芸天／山海経／青淵／鶴／立秋／旅雁／鷺／国初聖蹟歌／妻／史蹟太平洋戦／史蹟熱帯作戦／史歌南北作戦／吉野の落葉／寒林集／吉野浅の悲歌)

川浪 磐根 (山さんご／数知れぬ樹枝／梅花祭)
川端 千枝 (川端千枝全歌集)
河杉 初子 (藤むすめ／柿の葉／夕雲)

河野 慎吾 (雲泉以前／雲泉／雲泉以後)
神原 克重 (棚雲／玉樟)
上代 皓三 (石神井)
加藤 千浪 (詠師百首)
金沢 種美 (密林)
川島 園子 (新樹／蒼澁)
梶原緋佐子 (逢坂越)
加納 暁 (加納暁歌集)
香川 不抱 (桂孝二の不抱)
川崎陸奥男 (出帆旗)
加藤 克巳 (エスプリの花)
川邨みしほ (遠日)
神谷 政雄 (神奈備)
萱沼 利子 (尾花)
加藤 次郎 (白魚歌集／続白魚歌集)

き

木下 利玄 (銀／紅玉／一路／みかんの木)
木俣 修 (市路の果／みちのく／高志／冬曆／落葉の章／歯車／天に群星／呼べば訝／去年今年)

菊池 塘郎 (上福島の家／地下道と松原)
菊池 知勇 (山霧／風景／水流／裾野／菊池知勇全集)
菊山当年男 (天籟)
北原 放二 (北原放二歌集)
北原 白秋 (桐の花／雲母集／雀の卵／風隠集／海阪／白南風／夢殿／黒桧／溪流唱／牡丹の木／簗)
北見志保子 (月光／花のかげ／珊瑚)
君島 夜詩 (韓草／暗い川)
桐田 路村 (野鶴／閑雲)
菊池 剣 (道芝／白芙蓉)

く

九條 武子 (金鈴／薰染／白孔雀／無憂華)
久保田不二子 (苔桃／庭雀／手織衣)

久保井信夫 (薔薇園)
窪田 空穂 (まひる野／明暗／黎明／青みゆく空／濁れる川／鳥声集／泉のほとり／土を眺めて／朴の葉／青水抹／鏡葉／さざれ水／郷愁／冬日ざし／明闇／茜雲／冬木原／卓上の灯／丘陵地／老槐の下／木草と共に／去年の雪／初期拾遺)

窪田章一郎 (初夏の風／ちまたの響)
熊谷 武雄 (野火／閑古鳥)

栗原 潔子 (潔子集／寂寥の眼／戦中戦後／冬日抄)

黒沢 武子 (白鷺抄)

葛原 妙子 (橙黄／飛行／原牛／葡萄木立／朱盞)

黒田 清綱 (滝園歌集初編／滝園歌集二編／滝園歌集三編)

久米 幹文 (水屋集)

黒川 真頼 (墨水余滴)

楠田 敏郎 (身上雑唱)

こ

小泉 三 (夕潮／くさぶち／山西前線)
小出 繁 (小出繁翁家集上／小出繁翁家集中／小出繁翁家集下)

小暮 政次 (新しき丘／春望／花／春天の樹)

小杉 放庵 (放庵歌集／山居／石／故郷)

小宮良太郎 (草／山稜／ひなた／雨／いのち)

古泉 千樫 (屋上の土／青牛集)

後藤 史郎 (空に咲く花)

五島美代子 (暖流／丘の上／炎と雪／母の歌集／風／いのちありけり／時差)

近藤 元 (驕楽／南方の花)

近藤 芳美 (早春歌／埃吹く街／静かなる意志／歴史／冬の銀河)

近藤 芳樹 (寄居百首)

小池 道子 (柳の露上／柳の露下)

小金井素子 (窓)

児山 敬一 (動かれる青ぞら／絵のやうに)

五島 茂 (石 茂歌集／ヨーロッパ歌集海図)

五味 保義 (清峽／島山／此岸集)

さ

佐佐木信綱 (思草／遊清吟藻／新月／銀の鞭／常磐木／豊旗雲／鷲／椎の木／瀬の音／黎明／山と水と／秋の声)

佐藤佐太郎 (歩道／立房／帰潮／地表／群丘／冬木／形影)

佐藤 嘲花 (常臥して)

佐々木妙二 (診察室／佐々木妙二集／仕事着)

佐野 四郎 (白雲集)

狭山 信乃 (現代短歌大系より)

西郷 春子 (塔／あし原)

税所 敦子 (御垣の下草上／御垣の下草下)

斎藤 史 (魚歌／歴年／朱天／否かなる湖／やまぐに／うたのゆくへ／密閉部落)

斎藤 茂吉 (赤光／あらたま／つゆじも／遠遊／遍暦／ともしび／たかはら／連山／石原／石桃／暁光／寒雲／のぼり路／霜／小園／白き山／つきかけ)

斎藤 喜博 (羊歯／証)

相馬 御風 (曠野／霧華／波濤)

相良 由紀子 (睡蓮／御風詩集／御風歌集／月見ぐさ)

相良 義重 (低地帯／四季祭／越谷期／花市場)

坂井 菊枝 (薄紅梅)

坂口 保 (平歩青天)

酒井 広治 (雪来る前)

三条 実美 (難四之可他延上／難四之可他延下)

佐佐木弘綱 (竹柏集一之巻／竹柏集二之巻／竹柏集三之巻)

塙原 勇 (朝ぬくし澎湃巻三)

斎藤 英三 (獄中にて歌へる)

し

清水 乙女 (薫染／低徊)

清水 信 (黎明を行く／新陽／煙突／都市計画)

清水 恒子 (麻の花／厨と空／微風走る)

品田 聖平 (月光)

篠原志都児 (アララギ故人歌集より)

柴生田 稔 (春山／麦の庭)

塩川三保子 (冬果)

島木 赤彦 (馬鈴薯の花／切火／氷魚／太虚集／柿蔭集)

島木 健作 (異色十歌人より)

下村 海南 (芭蕉の葉蔭／天地／白雲集)

釈 迢空 (海やまのあひだ／春のことぶれ／水の上／遠やまびこ)

白水吉次郎 (白水吉次郎歌集)

進藤恵美子 (進藤恵美子歌集)

神保 允子 (春雪)

白岩 艶子 (采風)

四賀 光子 (藤の実／朝月)

清水 比庵 (比庵晴れ)

清水 千代 (白木蓮／岬)

椎木 恒男 (ひとり行く)

白井 尚子 (風)

司代 隆三 (一市民の歌／群衆)

信夫 澄子 (新日本歌人より)

す

杉浦 翠子 (寒紅集／朝の呼吸／藤浪／みどりの眉／浅間の表情／福沢桃介哀悼歌集)

杉田 鶴子 (菩提樹／杉田鶴子歌集)

杉本 寛一 (梢の雲／時は流るる)

鈴江幸太郎 (海風／柘榴の家／白夜)

鈴木 金二 (明闇)

鈴木 光子 (草傷／驟雨／晩涼)

鈴木 康文 (草露集／冬田／九十九里／新九十九里／

続々九十九里

隅田 葉吉 (野鳥詠草／隅田葉吉歌集)

須川 信行 (常葉園歌集巻上／常葉園歌集巻下)

末松 謙澄 (うきくさのあと)

角 利一 (いしずゑ)

炭 光任 (旅鴉)

鐸木 孝 (氷炎)

せ

瀬戸 信次 (相思樹)

昭憲皇太后 (昭憲皇太后御集)

そ

関 徳一郎 (斎庭)

宗 不旱 (筑摩鍋／支)

た

染谷 進 (染谷進歌集)

染谷ふみ子 (現代短歌大系より)

田波 御白 (御白遺稿)

田村 飛鳥 (鳴かぬ鳥)

田岡雁来紅 (大間集)

田谷 鋭 (乳鏡／水晶の座)

大悟法利雄 (第一歌集／翼／岩淵)

高木 一夫 (粟生短歌集)

高塩 脊山 (峽間)

高崎 正風 (たづがね集上／たづがね集中／たづがね集下)

高田 浪吉 (川浪／砂浜／堤防／家竝／高草／生存／木母／木母以後)

高田 保馬 (ふるさと)

高橋 城司 (野に咲く花／余映)

高橋 俊人 (寒食／杖家集)

高橋 英子 (紫／橘／冬花抄／宇智野)

高橋 希人 (淡彩／比黒)

- 高島 式部 (蓮月、式部二女和歌集)
 高村光太郎 (傑作歌選高村光太郎／白斧)
 高山 道之 (紙漉の歌)
 高安 国世 (真実／Vorfrühling／年輪／夜の青葉に／砂の上の阜／北極飛行／街上／虚像の鳩／朝から朝)
 滝口 英子 (婦負野)
 竹内 薫兵 (青夏集)
 竹添 履信 (晴天)
 竹尾 忠吉 (八衢／平路集／南北／朝雨)
 武山 英子 (傑作歌選第二輯武山英子／武山英子拾遺)
 立花 馨 (たちばな)
 橘 馨 (中央街／深巷)
 橘 漣子 (さざなみ)
 橘 曙覧 (志濃夫廼舎歌集)
 橘 道守 (橘道守家集上／橘道守家集下)
 橘 宗利 (荻壺)
 田中 四郎 (青野)
 立岩 茂 (秋蝶)
 谷 鼎 (伏流／青あらし／冬びより／松籟)
 谷 馨 (正述心緒)
 谷元 知安 (梨花集)
 丹沢 豊子 (短)
 伊達 千広 (夕日岡月次集より)
 武島 羽衣 (現代短歌大系より)
 田山 花袋 (花袋歌集)
 竹久 夢二 (小夜曲／山へよする)
 田辺 駿一 (青木集)
 田中火紗子 (出船)
 高橋喜忽勝 (天草灘)
 武政 杜郎 (堂坊主の歌)
 高井 邦夫 (麦田の風)
 武川 忠一 (氷湖)
- 千葉 鳳明 (現代短歌大系より)
 千代 国一 (鳥の棲む樹／蔭のある道／冷氣湖／冬の

- 沙
 芽野 蕭々 (「明星」より／「スバル」より)
 芽野 雅子 (みをつくし／金沙集／展望集／旅びと)
 津端 潔 (清古抄)
 津端 修 (八つ手の花)
 都筑 省吾 (夜風)
 対馬 完治 (蜂の巣)
 築地 藤子 (椰子の葉)
 塚田 菁紀 (春燕／風韻／寒庭)
 塚本 邦雄 (水葬物語／裝飾楽句／日本人霊歌／水銀伝説／緑色研究／感幻集)
 土田 耕平 (青杉／斑雪／一塊／土田耕平遺稿第二巻)
 土屋 文明 (ふゆくさ／往還集／山谷集／六月風／少安集／葎菁集／山下水)
 坪野 哲久 (百花／九月一日／碧巖)
 津軽 照子 (野の花／雪にこる)
- 貞明 皇后 (貞明皇后御歌謹解)
 寺門 一郎 (光流)
 寺沢 亮 (石蕨集／櫻芒集)
- 土岐 善静 (現代短歌大系より)
 土岐 善麿 (はつ恋／黄昏に／不安なく／佇みて／街上不平／心遊ばず／雑音の中／緑の地平／緑の斜面／空を仰ぐ／初夏作品／昭和三年前後／感傷遊戯／新歌集作品一／新歌集作品二／六月／周辺／秋晴／夏草／冬風／春野／遠隣集／早稲田抄／歴史の中の生活抄／相聞抄／額田抄／四月抄／若葉抄／連山抄／東西抄／眼前抄／十方抄)
 遠山 光栄 (杉生／彩羽／褐色の実／青蝶)

- 富田 碎花 (悲しき愛)
 富小路植子 (未明のしらべ／白曉)
 富岡 冬野 (空は青し)
 豊島 晃 (美穂)
 豊島 逃水 (ゆく春／五月の空)
 泥 清一 (風と大空)
- 内藤 銀策 (旅愁／世界地図／武蔵野頌／銀策歌集拾遺／銀策歌集拾遺以後／御白遺稿序歌)
 中 勘助 (飛鳥)
 中川 一政 (向ふ山)
 中河 幹子 (夕波)
 中川 與一 (秘帖)
 中島 哀浪 (背振／勝鳥／早春)
 中城ふみ子 (乳房喪失)
 中西 悟堂 (安達太良)
 中野 菊夫 (風の日に)
 中原 綾子 (真珠貝／深淵／みをつくし／刈株／閻浮提)
 中村 憲吉 (馬鈴薯の花／林泉集／しがらみ／軽雷集／軽雷集以後／松の芽／中村憲吉集／アララギ年刊歌集より／中村憲吉全集第一巻の補遺)
 中村 三郎 (中村三郎集)
 中村 正爾 (中村 正爾歌集)
 中村 柊花 (青春以前の作を創作より抄出／青春)
 中村 素堂 (ふちばかま)
 中村 美穂 (仏顔)
 中井コツフ (山雨)
 長沢 美津 (汜青／垂水影／花芯／雲を呼ぶ／水面)
 長塚 節 (長塚節全歌集本篇／長塚節全歌集補遺篇)
 南原 茂 (形相)
 中島 歌子 (柳の一葉上／柳の一葉下)
 中邨 秋香 (秋香集)
 鳴海 要吉 (土にかへれ／やさしい空)
 並木 凡平 (路傍の花)

中村 孝助 (土の歌／野良に戦ふ)
中沢 庭 (桑麻集／天谷集)

に

西田 幾多郎 (父西田幾多郎の歌)
西田 嵐翠 (五十年の貧)
西村 陽吉 (都市住居者／街路樹／街路樹以後／晴れた日／舗道の歌／緑の旗)
西 升子 (百世草)
西川 百子 (無産者／刀葉林地獄)
西出 朝風 (半生の恋と餓／少年の歌)

ぬ

沼波美代子 (塵にまみれて)

の

野沢 柿葺 (鉄拐)
野田 孝之 (夏)
野村望東尼 (もとのしづく)

は

長谷川 銀作 (桑の葉／煙景／木原／寸土／低い窓／夜の庭／夜の庭以後)
橋田 東声 (地懷／地懷以後)
橋本 徳寿 (船大工／太石集／赤帝集／竹院集／海峡／流域／岑／桃園／ラン書房)
八田 知紀 (八田知紀歌集)
服部 躬治 (迦具土)
初井しづ枝 (花鱗／藍の紋／白露虫／冬至梅)
花田比露思 (さんげ／一人静)
花岡 謙二 (歪められた顔／草の葉はゆれる)
浜 梨花枝 (風紋)
早川 幾忠 (紫塵集)
林 菊之輔 (鉄刀木)

林 圭子 (棕の花／野のあたり)
原 阿佐緒 (涙痕／白木槿／死をみつめて／うす曇／黒い扉)

原 三郎 (牧草地帯／朝の実験室／原三郎全歌集)

原 真弓 (敵艦)

原 正臣 (縦屋詠草)

半田 良平 (白露集／黎明／野づかさ／旦暮／辛木／辛木以後)

長谷川 瀧涯 (おぼろ舟)

葉山耕三郎 (世紀の顔)

花田 世大 (是々非々)

長谷川 誠一 (新短歌生活)

服部 直人 (みどり木／動物聚落)

畑 和子 (彩層)

馬場あき子 (地下にともる灯)

原田 泰治 (人間野)

ひ

樋口 一葉 (樋口一葉家集)

東久世通禧 (竹廬舎歌集)

久方寿満子 (光雲／火山系／海炎)

平賀 春郊 (異色十歌人より／新万葉集より／現代短歌大系より)

平野 宣紀 (山行抄)

平野 百穂 (寒竹)

広野 三郎 (白堊／鳴瀬／あかつき)

平野 万里 (わかき日／我妹子／よせあつめ／イタリヤ紀行／第三期明星より)

平出 修 (平出修遺稿)

ふ

福田 夕咲 (花束一束)

藤川 忠治 (練馬南町)

藤沢 古実 (国原)

藤原 東川 (新壘／乳木)

藤森 朋夫 (冬岡／笹群)

冬野 清張 (暦日)

福田 行誠 (釈教百首／行誠老和上遺稿)

福本 日南 (日南集)

淵 浩一 (海のゆふべ)

藤居 教恵 (松の花／椎の木)

藤本芳由季 (朗らかな散歩)

藤田 晋一 (街の切符)

藤井千鶴子 (盛京)

福田米三郎 (指と天然)

舟崎 静枝 (柳眼／水駅)

福田 文枝 (真鶴／蒼き年輪／瑞雲)

ほ

穂積 忠 (雪祭／叢)

細井 魚袋 (穂せゆく生活／椎葉集／五十年)

堀内 卓 (アラギ故人歌集一より)

堀内 通孝 (丘陵／北明／北明以後抄／風物歌集)

堀口 大學 (パンの笛／男ごころ／涙の念珠)

細川 春流 (奇題百詠)

ま

真島 武 (清水谷)

真鍋美恵子 (白線／朱夏／玻璃)

正富 汪洋 (夏廂／小鼓)

正岡 子規 (定本子規歌集)

榎富 照子 (月鳳里の歌／稔／笛／檜の木のもと／凝禱／郷愁)

松倉 米吉 (松倉米吉全集)

松田 常憲 (ひこばえ／好日／三径集／秋風抄／春雷／凍天／凍天以後)

松村 英一 (白露集／黎明／春かへる日に／春かへる日に以後／やますげ／荒布／初霜／河社／標石／露原／山の井／石に咲く花／雲の座)

松本 滋代 (明月抄／晚紅花／帰鳥)

松本常太郎 (棟花風／蒼丘／山上の雲)

- 松井 如流 (水)
 松岡 貞総 (山彦／黒潮／那智／心象無限／金剛)
 前川 佐美雄 (植物祭／春の日／白鳳／大和／天平雲／日本し美し／金剛／紅梅／積日／搜神／白木黒木)
 前田 夕暮 (哀楽／収穫／陰影／生くる日に／深林／原生林／虹／水源地帯／青煙は歌ふ／烈風／青天祭／富士を歌ふ／新頌富士／耕土／埴土地帯／夕暮遺歌集／疲れ)
 丸山 芳良 (檀／丹灰集)
 丸岡 桂 (長恨)
 松波 資之 (花仙堂家集)
 間島 冬道 (冬道翁家集上／冬道翁家集下)
 松浦 辰男 (芳宜乃古枝)
 松の門三艸子 (松の門三艸子歌集)
 丸山 作樂 (盤之屋歌集)
 正宗 敦夫 (鶏肋)
 万造寺 齊 (憧憬と漂泊)
 松木 静泉 (風露)
 松本 昌夫 (防雪林)
 榎本 楠郎 (娑婆の歌)
 前田 透 (漂流の季節)
- 三浦 守治 (移缶集)
 三ヶ島 霞子 (三ヶ島霞子歌集)
 三木 アヤ (地底の泉)
 三国 玲子 (空を指す枝)
 三苦 京子 (青梅)
 水城 孝 (北山杉)
 三井 甲之 (三井甲之歌集)
 美禰 国樹 (美禰国樹集)
 水野 葉舟 (明暗／滴瀝)
 水町 京子 (不知火／水ゆく岸にて)
 光岡 良二 (深冬)
 宮 柊二 (群鶴／山西省／小紺珠／晩夏／日本晩歌／多く夜の歌／藤棚の下の小室)

- 宮崎 一夫 (指紋)
 宮沢 賢治 (宮沢賢治歌集)
 宮野 佐登 (合歓)
 三浦 義一 (悲天／草莽)
 峯村 国一 (玉砂集)
 三田 滯人 (水脈)
 幹 愴太 (二重人格者)
 三木 羅風 (トラピスト歌集)
 見原 文月 (見原文月全歌集)
 満岡 照子 (火の山)
- 村上 成之 (翠微)
 村田 利明 (早瀬／夕川／静物／晩餐)
 村野 次郎 (樗風集)
 村山 松根 (忘貝上／忘貝下)
 村山 槐多 (槐多の歌へる)
- 明治 天皇 (明治天皇御集上／明治天皇御集下)
- 望月 光 (アララギ故人歌集一より)
 百田 楓花 (愛の鳥)
 森 二郎 (阿津佐)
 本居 亮一 (苔水／対岳集)
 本居 豊 (あきの屋集上／あきの屋集下／秋の屋集拾遺)
 森園 天浜 (白昼の山／森園天浜歌集)
 森山 謙一郎 (冬牡丹)
 森山 汀川 (峠路／雲垣／樹雪)
 森山 縫子 (霧水)
 森岡 貞香 (白蛾)
 門間 春雄 (門間春雄歌集)
 森 鷗外 (歌日記／沙羅の木)

- 森 早稲穂 (早稲穂歌集)
- 矢ヶ崎 柴垣 (山上湖上)
 矢沢 孝子 (鶏冠木／はつ夏／矢沢孝子歌集)
 矢代 東村 (一隅より／パンとバラ／熔鉱炉／反動時代／早春／大衆と共に)
 矢部 道気 (黒竹)
 矢穂 久仁子 (感情線)
 安江 不空 (安江不空全歌集)
 安田 章生 (心象／表情／明日を責む)
 安田 勝子 (山原)
 安田 青風 (春鳥／季節)
 柳原 白蓮 (踏絵／几帳のかげ／幻の華／柴の梅／流転／地平線)
 柳瀬 留治 (立山／霜髪／山／懐かしき人々／檜椎葉／山よさらば)
 藪 阿久里 (陽の透る道)
 山県 有朋 (椿山集)
 山川 登美子 (恋衣)
 山川 柳子 (木苺と影／母と子)
 山口 不二花 (山口不二花歌集)
 山口 茂吉 (杉原／赤土／海日／高清水)
 山崎 一郎 (壁の花)
 山下 清 (水あくば)
 山下 秀之助 (冬日／雪雲／底流／万灯)
 山下 陸奥 (春／靈鳥／平雪／純林)
 山田百合子 (野路／幼瞳／影／波)
 山本 友一 (北窓／布雲／黄衣抄)
 山崎 剛平 (挽歌)
 安成 二郎 (貧乏と恋と／新興文学全集第十巻より／夜知麻多)
 柳田新太郎 (現代短歌全集第二十一巻より)
 山田清三郎 (囚衣)
 山下喜美子 (薔薇の位置)

ゆ

湯本 禿山 (アララギ故人歌集より)
結城哀草果 (山麓／すだま／群蜂／まほら)
湯本 喜作 (ちぎれ雲／道はるか)

よ

與謝野晶子

(みだれ髪／小扇／毒草／恋衣／舞姫／夢の華／常夏／佐保姫／春泥集／青梅波／夏より秋へ／さくら草／朱葉集／舞ころも／晶子新集／火の鳥／太陽と薔薇／草の夢／流星の道／瑠璃光／心の遠景／霧嶋の歌／深林の香／緑階春雨／冬柏亭集／山のしづ／草と月光／白桜集)

與謝野 寛

(万葉廬詠草抄／東西南北／天地玄黄／鉄幹子／紫／うもれ木／毒草／木枯の夜／相聞／榎の葉／鴉と雨／炉上の歌／春／與謝野寛遺稿歌集)

與謝野禮蔵

(禮蔵法師歌集)

依田 秋園

(山野／溪声)

横田 専一

(通風筒／芳香族／柘榴／めたばりすむ)

吉埴 庄亮

(寂光／くさはら／烟霞集／大陸巡遊吟／開墾／大稜威／海獄／風景／光のごとし／稲の花／霜ぶすま)

吉田 正俊

(朱花片／天沼／黄集)

吉野 秀雄

(若徑集／早梅集／寒蟬集／晴陰集／含紅集)

吉井 勇

(酒ほがひ／昨日まで／片恋／祇園歌集／仇情／黒髪集／東京紅灯集／未練／祇園双紙／毒うつぎ／鸚鵡石／河原蓮／夜の心／故園／悪の華／鸚鵡杯／人間経／天彦／風雪／遠天／朝影／短歌歳時記／霹靂／旅塵／玄冬／短歌風土記大和の巻／寒行／流離抄／短歌風土記山城の巻／残夢／形影抄)

米田 雄郎

(日没／朝の挨拶／青天人／忘却／終焉の地)

米川 稔 (鋪道夕映)
呼子丈太郎 (礎)
吉田 雄司 (砂庭)

わ

和山 山蘭

(酒壺／きさらぎ／松風)

和田 智恵子

(夏炎抄)

若林 牧春

(冬鶯)

若山 喜志子

(無花果／白梅集／筑摩野／おもかげ／芽ぶき柳)

若山 牧水

(海の声／独り歌へる／別離／路上／死か芸術か／みなかみ／秋風の歌／砂丘／朝の歌／白梅集／溪谷集／さびしき樹木／くろ土／山桜の歌／黒松)

渡辺 順三

(貧乏の歌／烈風の街／新らしき日／日本の地図)

渡辺 信子

(黒葉抄／山河)

渡辺 博史

(黒葉抄／山河)

渡辺 真

(林潮集)

渡辺 忠秋

(桂蔭上／桂蔭下)

渡辺 重春

(桜園自撰歌集)

割田 斧二

(心曲)

渡辺 湖畔

(草の葉／若き日の祈禱)

ゐ

井伊 文子

(浄命／驚ゆく空)

井田 金次郎

(緑炎)

井戸川 美和子

(冬虹／緑羅)

井上 文雄

(調鶴集上／調鶴集中／調鶴集下)

井上 通泰

(南天莊詠草第一篇／南天莊詠草第二篇／南天莊歌稿)

井上 雪下

(雪玉集)

井上 義雄

(煉瓦にひしがれた土)

を

小川 水明

(水明歌集)

小田 観螢

(隠り沼／忍冬)

小名木 綱夫

(太鼓／補遺)

小野 昌繁

(途上／新宿／冬花／心約／秋山／満花／光心)

尾上 紫舟

(銀鈴／静夜／永日／日記の端より／白き路／空の色／朝ぐもり／み光のもとにて／行きつつ歌ひつつ／間歩集／素月集／芳塵／晴川／ひとつの灯)

尾張 穂草

(白砂集／松かさ／くろはな)

尾山 篤二郎

(さすらひ／明る妙／野を歩みて／曼珠沙華／草籠／白圭集／平明調／雲を描く／清明／とふのすがこも)

岡 稲里

(朝夕／早春)

岡 麓

(庭苔／小笹生／朝雲／宿墨詠草／涌井／冬空／雪間草)

岡崎 義恵

(碧潮／泉声)

岡野直七郎

(谷川／都塵に立つ／太陽の愛／林の道／夜明け空／地の光／花を尋ねて／夕日の丘／朝の鐘)

岡本 かの子

(かろきねたみ／愛のなやみ上／愛のなやみ下／浴身／わが最終歌集／深見草／歌日記抄／散華抄)

岡本 大無

(深淵の魚／断虹／大無歌集)

岡本 巖

(思想と感情／帝都の情熱)

合同歌集

新万葉集卷一／卷二／卷三／卷四／卷五／卷六／卷七／卷八／卷九／卷特／新年御歌会始／支那事変歌集戦地篇／支那事変歌集銃後篇／朝日短歌第一集／アララギ故人歌集卷一／あをぞら／多摩第一歌集／多摩第二歌集／多摩第三歌集／多摩第四歌集／冷人／玉琴／瓦解集／諷歌新聞／開化新題歌集／東京大家十四歌集／松楓集／大八洲歌集上／大八洲歌集下／千代田歌集第一編／千代田歌集第

二編／千代田歌集第三編／浅瀬の波／常磐
会詠草初篇／常磐会詠草第二篇／常磐会詠
草第三篇／常磐会詠草第四篇／常磐会詠草
第五篇／やまとにしき／竹柏園集第一篇／
竹柏園集第二篇／あけぼの／玉川集／いか
づち詠草／わか菜会詠草／くさぶえ／瑠璃
草／朝嵐夕雨／曙集／白すみれ／征清歌集
／黒髪／白光／叙景詩／凌霄花／冷人／竹
の里人選歌／沼津風／木馬集／第二木馬集
／短歌民族第一輯／交響／信濃歌選／山来
帰／詩歌作品第一輯／短歌建設作品集1／
短歌建設作品集2／ラ・パラポール／前衛
／一九三七年新短歌／一九三八年新短歌／
おとのない三角／一九二九年版プロレタリ
ア短歌集／一九三〇年版プロレタリア短歌
集／世紀の旗／集団行進／生活の歌／冬空

書評より

朝日新聞

昭和四十七年九月十八日朝刊出版リーダー所載
明治・大正・昭和三代によまれたおもな短歌四十万首
を用語によって分類した『現代短歌分類辞典』（津端修
編・五五〇円）の第三十二巻がこのほど刊行された（A
6判、約三八〇ページ）。歌人の歌集・全集（故人の主
要歌人はその全作品、現存歌人は昭和三十二、三年まで）
の初版本などからカードをつくり、その歌に使われた歌
語をひき出して五十音順に配列し、その歌語の意味、文
法上の用法を解説して収録している。たとえば第三十二
巻には「あまりて」から「雨」（一部）までの四千五十
六首を収めており、いわば歌語辞典、あるいは短歌の索
引辞典といった内容。

「立岩 茂」

津端氏の仕事は、津端氏自身自身分類編纂に人知れぬ
大骨を折る代わりに、それが完成した晩に於ては、どの
位世の人の時間や労力の無駄が救われるか、わからない
のである。

そうした縁の下の力持ちの仕事に吾々は尊敬を払いた
い。

（日本事務能率協会参興）

国文学 第五巻 第一号 所属

谷 鼎

- 一、明治・大正・昭和三代の短歌十六万（現在は五十六
万）首（古人の主要歌人はその全作品、現存歌人は、
昭和五十三年までの歌集）を単語別に改めて編集
したもの。
- 二、以上の歌語としての国語辞典・文法辞典であり、活
用語の如きは活用形毎に列挙してあるから、使用例
による活用形の有無の類は一目瞭然。
- 三、古典語と現代語との関係を示すため、古典の物語・
歌集・日記中の用例を豊富にあげ、新造語を含む作
品・作者・継承者相似作 品なども容易に見えてき
る。又、古典文法との相違点の発見、三代人の表現
上の好み等の考察にも至便。
- 四、研究者への資料の提供とその苦勞の軽減とを目的と
した仕事であり、各項目下に列挙された歌数は、五
十六万首分のいくつかを、常に正確に示す。
- 五、実作者にとっては、読むことのみによっても、作歌
意欲を昂めるのに必ず役立つ。